最近のタジキスタンにおける考古学

香　山　陽　坪

中央アジアにおける考古学的研究は，帝政時代には殆んどおこなわれなかった。ソヴェート時代になってから次第に研究が進められるようになったが，本格的になったのは1930年代の後半からである。周知のように，イスラム以前の中央アジアの歴史については，文献史料が殆んど存在しないので，どうしても考古学的史料によらなければならない。しかし，ソヴェート時代の初期にはタジキスタン（タジク共和国）を訪れる考古学者はいなかった。なるほど，エム・エス・アンドレエフ M. C. Андреев の研究があるが，それは民族学的研究であり，またヴェ・エル・チェイルイトコ B.P. Чейлытко は晩年の15年間をタジキスタンの考古学的研究にささげたが，彼は著作を残さなかった。1933年にタジキスタン北部のザラフシャン川上流のムーグ山城[1]でソグド文書が発見された機会に，ア・ア・フレイマン A. A. Фрейман を隊長とする調査隊が送られたのが，タジキスタンにおける最初の組織的な考古学的研究である。ちょうどその頃から中央アジアにおける考古学的研究の気運が高まり，1937年には現在も引きつづいておこなわれているエス・ペ・トルストフ C. П. Толстов のホラズム調査隊が発足し，その他中央アジア各地においても組織的な考古学的調査がようやく始まったが，タジキスタンではフレイマン以後組織的な調査はおこなわれなかった。タジキスタン考古学の開花はタジク（最初はソグド=タジクと称された）考古学調査隊まで待たねばならなかった。

中央アジアにおける考古学の発達は独ソ戦争のため頓挫をきたしたが，ソ連邦の勝利の見通しがついた1945年２月モスクワにおいて全ソ連邦考古学会議が開かれ，その席上，他の幾つかの調査隊とともにタジク考古学調査隊がつくられることとなり，その隊長にはア・ユ・ヤクボフスキイ[2] A. Ю. Якубовский が選ばれた。この調査隊にはソ連邦科学アカデミア考古学研究所（1960年まで物質文化史研究所と呼ばれていた），タジク共和国アカデミア歴史研究所[3]，国立エルミタージュ博物館のメンバーが参加し，その活動を推進するのに大きな役割を果したのは，当時タジキスタン共産党の書記長をしていたソ連邦科学アカデミア・アジア諸民族研究所の現所長のベ・ゲ・ガフロフ Б. Г.

Гафуров である。タジク考古学調査隊は1946年に調査・発掘を始め，現在もなお活動をつづけており，タジキスタンの歴史の解明に大きな役割を果しているが，それとともに特筆せねばならないことは，この調査隊によって幾多の考古学者が生み出されたことである。現在タジキスタンにおいて働いている中心的な考古学者はすべて，この調査隊に参加して訓練されたのであった。

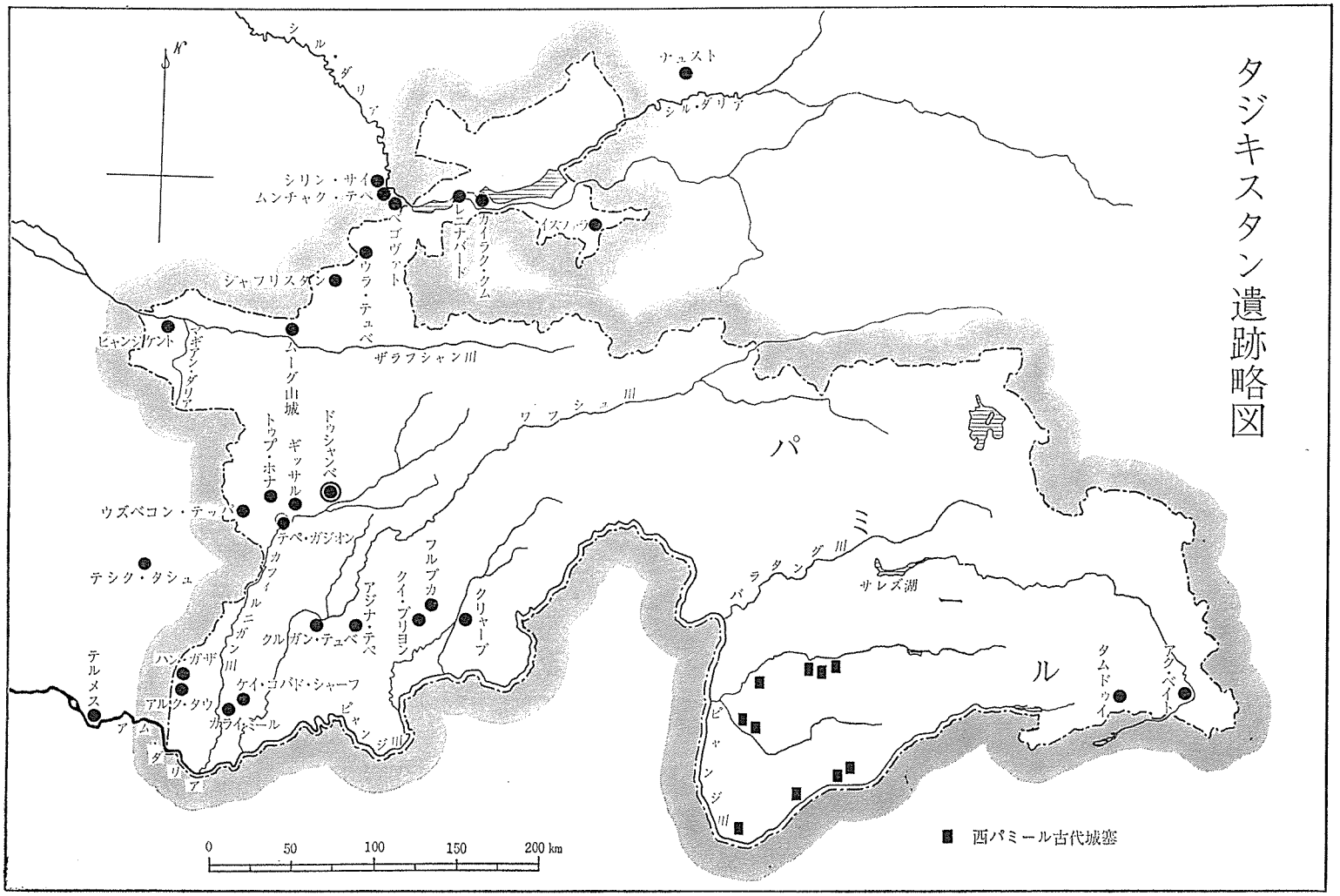
タジク考古学調査隊は幾つかの隊に分れてタジキスタン各地の調査・発掘をおこなっているが，いかなる隊が組織されたかを各年ごとに見るのは繁雑にわたるので，一例として1960年について見ると，次のような隊があった。

1. 東パミール隊——隊長ヴェ・ア・ラーノフ В. А. Ранов.
2. ギッサル隊——隊長イェ・ア・ダヴィドヴィチ Е. А. Давидович.
3. ワフシュ隊——隊長テ・イ・ゼイマリ Т. И. Зеймаль.
4. ホージェント=ウスルーシャナ隊——隊長エヌ・エヌ・ネグマトフ Н. Н. Негматов.
5. ピャンジケント隊——隊長ア・エム・ベレニツキイ А. М. Беленицкий.
6. クリャーブ隊——隊長エ・グリャモワЭ. Гулямова.
7. 考古学地図資料蒐集隊——隊長ベ・ア・リトヴィンスキイ Б. А. Литвинский.

タジク考古学調査隊は，これまでに4冊の報告書[4]を出しているほか，タジク共和国科学アカデミア歴史研究所は毎年その紀要に『タジキスタンにおける考古学的研究』[5]と題する1冊を刊行している（最近報告書の5が出た。МИА, 136)。

タジク考古学調査隊が活動を始めたころは，タジキスタンにおいては旧石器時代はもちろん，新石器時代や青銅器時代の遺跡も殆んど知られていなかった[6]。この時期に中央アジアの他の地方における考古学研究の成果を取入れて始めて書かれたタジキスタンの通史が，さきのガフロフの『タジク民族史』[7]である。これを最近できあがった3巻5冊からなる『タジク民族史』[8]と比較すると，タジキスタンにおける考古学の発達がきわめて大であることがわかる。1938年にタジキスタンの西部国境に近いウズベキスタンのテシク・タシュ Тешик-Таш 洞窟で，ア・ペ・オクラドニコフ А. П. Окладников がムスティエ式の旧石器とネアンデルタール型の人骨を発見して以来，タジキスタンにも旧石器の存在が予想されるようになった。そしてこのことは1948年からタジク調査隊に加わって各地を調査したオクラドニコフ[9]の活動によって実証され，さらにその後パミールの石器時代の調査を始めたラーノフ[10]によって海抜4000メートルの高地にも旧石器の遺跡が発見されている。これらの石器時代専門の考古学者のほか多くの学者の活

タジキスタン遺跡略図


N
シル・ダリア
ナュスト
シリン・サイ
ムンチャク・テペ
ペゴヴァト
レニナバード
カイラク・クム
イスファラ
ウラ・テュベ
シャフリスタン
ヒャンジケント
ギッシ・ダリア
ハーグ山城
ザラフシャン川
ワフシュ川
ドゥシャンベ
トゥプ・ホナ
ギッサル
ウズベコン・テッ
テペ・ガジオン
テシク・タシュ
カフィルニガン川
フルブカ
クイ・ブリヨン
アジナ・テペ
クルガン・テュベ
クリャーブ
パミール
バラタング川
サレズ湖
タムドゥイ
アク・バイト
テルメス
ハンガヤ
アルク・タウ
ケイ・コバド・シャーフ
カライ・ミール
アムダリア
ピャンジ川
0
50
100
150
200 km
西パミール古代城塞

動によって新石器時代，青銅器時代の遺跡も多数明らかになった。その結果，現在タジキスタンにギッサル文化[11] という新石器文化が設定されている。この文化は前3千-2千年紀に属し，タジキスタン南部のカフィルニガン川やワフシュ川の流域に分布し，その代表的な遺跡はテペ・ガジオン Тепе-Газион とクイ・ブリヨン Куй-Бульен である。おもに礫を加工した粗末な石器が特色で，手づくねの土器もあり，この文化の担い手は農業と牧畜をおこなっている。この文化は中央アジア東部の山地種族が中央アジア西南部の先進的農耕文化（アナウ文化）に触発されて起ったものと考えられる。また青銅器文化については，カイラク・クム文化[12] がある。この文化の各称はレニナバード附近の地名によったもので，前15-8世紀のころフェルガナ西部，タシュケント・オアシス，ザラフシャン河谷にひろがっており，アンドロノヴォ文化[13] やタザバグヤブ文化[14] に似ていると同時に，フェルガナのチュスト文化[15] と深い関係があり，住民は農耕と牧畜をおこなっていた。またこの文化では青銅器の製造が大きな意義をもち，鋳型が多数発見されている。

タジキスタン北部は中世のウスルーシャナの地で（現在タジク共和国の国境線はフェルガナ盆地の出口，シル・ダリアの北流点で，東はキルギス，西はウズベクの両共和国にはさまれてくびれている），その東部はフェルガナにつらなり，またその西南部はザラフシャン川上流の東部（山地）ソグドで，また北部はシャーシュ（タシュケント・オアシス）につづいている。シル・ダリアが北にまがる附近，行政的にはウズベク共和国であるが，タジク共和国に接するベゴヴァト Беговат で大発電所が建設されたさい，1943-44年にヴェ・エフ・ガイドゥケヴィチ В. Ф. Гайдукевич によって同市附近のムンチャク・テペ Мунчак-Тепе の発掘がおこなわれ，古代から中世初期の多数の遺物が発見された[16]。またタジキスタンに属するザラフシャン川上流のソグド東部にはさきに挙げたソグド文書の発見で有名になったムーグ山城，その下流にピャンジケント[17] の都城址がある。ピャンジケントは7-8世紀に栄えた都市で，タジク調査隊はその第1回の調査以来重要な発掘目標とし，毎年新しい遺跡や遺物が発見され，中世初期のソグド文化[18] の宝庫になっている。

ザラフシャン川とほぼ平行に東西に走るザラフシャン山脈とギッサル山脈の南のカフィルニガン川とワフシュ川の流域は，ウズベク共和国のスルハン・ダリアの流域とともに古代のバクトリア，のちのトハリスタンである。バクトリアの大部分を占めるのは，現在のアフガニスタンであるが，タジキスタン南部のかなりの部分も，バクトリアのなかに入っていたことは確かである。バクトリアの物質文化については1926年に Dalton

が発表したオクサス（アム・ダリア）遺宝[19]が有名であるが，バクトリア——北部バクトリア——の考古学的研究はタジク考古学調査隊が活動を始めるまでは，殆んどおこなわれなかった。ただ1936-37年にエム・イェ・マッソン M. E. Массон の率いるテルメス考古学総合調査隊が，タジキスタンに接するテルメス附近の調査をし，仏教寺院の跡などを発掘したにすぎないが，それによって南タジキスタンにおいてバクトリア時代の遺跡や遺物が発見される可能性が明らかになった。タジク考古学調査隊が発掘したバクトリア時代の遺跡で注目すべきものは，エム・エム・ディヤコノフ M. M. Дьяконов が1950-51年に調査，発掘したカフィルニガン川下流のカライ・ミール[20] Калаи-Мир と 1950, 52-53年に調査，発掘したその附近のケイ・コバド・シャーフ[21] Кей-Кобад Шах の二つのゴロディシチュである。前者は前6-4世紀から後1-2世紀，後者は前2世紀から後2-3世紀のものである。その他著るしいものには1946-48年に同じくディヤコノフが調査発掘したギッサル附近のトゥプ・ホナの墓地がある[22]。これは紀元前後からイスラムの侵入までの間の数層に重った古代バクトリア人の墳墓である。

タジク考古学調査隊はその活動を始めた数年間は南タジキスタンにも力を割いていたが，その後は北部のピャンジケントに全力を集中しているようである（もっとも，以下で若干触れるように，南タジキスタンの調査・発掘をおこなっていないのではない）。

タジキスタンの東半部はパミール高原である。さきに見たように，パミールの石器時代の研究が最近始まったが，パミールの考古学的研究を最初におこなったのはア・エヌ・ベルンシュタム A. H. Бернштам である。彼はセミレチエ，フェルガナ，天山などで主として遊牧民の文化の研究をしていたが，1946年に始めてパミールに歩をのばし，ついで1947, 48, 52年とパミールの調査をおこない[23]，1956年にはタジク調査隊の東パミール隊を率いて四たびパミールに赴いた。この4回のパミール調査においてベルンシュタムは，彼がサカと考えた前6-4世紀の遊牧民の墳墓をアク・ベイト Ак-Беит，タムドゥイ Тамды などで多数発掘した。

つぎに1957年から1961年までのタジキスタン考古学の研究の二，三について見よう（ただし，だいたい歴史時代にかぎり，またピャンジケントについては触れない）。ついでに一言して置かねばならないのは，これまで歴史学者は書斉のなかで中世の歴史家や地理学者の文献資料にあらわれている地名を現在の地名といろいろ比定してきたが，Tomashek, Marquart, さらにバルトリド[24] В. В. Бартольд らの如き学者にとってもそれは仲々困難なことであった。しかるに，考古学者が実際にその土地を踏み，地中に埋れた遺跡を掘出すことによって，中世の学者の書いたことを如実に再現し得る可能性

が生じて来たことである。このことに関しタジキスタンにおいて，まず第一に挙ぐべきはウスルーシャナ地方の発掘を指揮しているネグマトフである。彼はタジク考古学調査隊報告第3冊に「古代より10世紀に至るウスルーシャナの歴史的=地理的概観」[25]を発表し，その後『古代および中世初期のウスルーシャナ』[26]という著書を出した。彼の指揮のもとに1955年以来レニナバード（旧ホージェント），ウラ・テュベ，シャフリスタンなどの中世都市の発掘がおこなわれている。

ソグド東部ではピャンジケントの上流でザラフシャン川に流入しているマギアン・ダリアの流域の調査をベ・ヤ・スタヴィスキイ Б. Я. Ставиский がおこなっている。ピャンジケントのトクサン・カレズはこの川から水を取っており，またこの流域はザラフシャン山地からソグドやカシュカ・ダリア河谷に通ずる重要な交通路で，5,6世紀から12世紀までの各種の中世遺跡が多い。

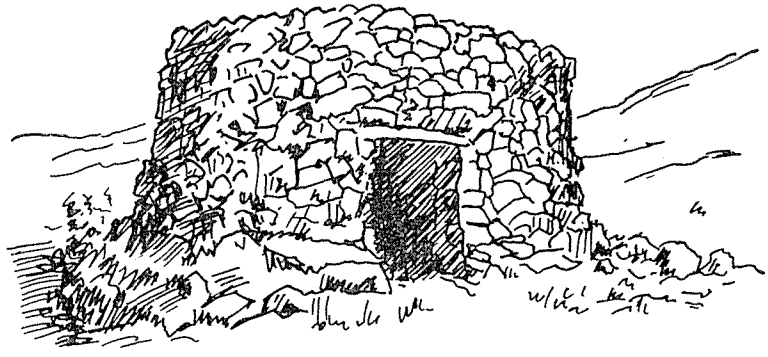


図1　クルム

フェルガナ盆地を北方から囲む山地には，土地の人に魔法使いの家というような意味で色々に呼ばれているクルム курум という石の建造物がある。これは不規則な形の石を積上げてつくられ，その形や細部は様々であるが，内部が部屋のようになっていて，そこに死者が葬られていた。1957年にリトヴィンスキイがレニナバード北方の山地のクルムを調査し，その副葬品から判断すると，北タジキスタンのクルムは前2-1世紀から後6-7世紀の各時代にわたっている。これを残したのは遊牧民で，約千年間殆んど同一の埋葬様式を保ったことは最初に到来したものの伝統が強くつづいたことを示しているが，なお将来の研究によって中央アジアの遊牧民の歴史の解明に役立つと彼は考えている。リトヴィンスキイは1952,54年に引きつづき1956年にイスファラ地方で3-5世紀の遊牧民の墳墓の発掘をおこなった。そのなかには遊牧民的様式を持ちながら定住

民の影響をうけた過渡的なものもある。

カフィルニガン川の流域のビシュケント河谷においてア・エム・マンデリシュタム A. M. Мандельштам は1955年以来アルクタウ Аруктау のほか，5カ所の墓地[27] で約350基のクルガンを発掘し，さらに1958-59年にその附近のハン・ガザ Хан-Газа の小さなゴロディシチェを発掘した。このゴロディシチェは貨幣などによりクシャン時代のもので，その出土品とクルガンの出土品との比較によって，これらのクルガンは一つの墓地のものを除き，ハン・ガザより古い遊牧民のものであることがわかり，この地方におけるクシャン時代，あるいはそれ以前の遊牧民の侵入が明らかにされた。

1955年におこなわれたギッサル河谷の調査がゼイマリによって1958年に再開され，この年はウズベクとの国境に近いウズベコン・テッパ Узбекон-Теппа のゴロディシチェの予備調査が中心となった。このゴロディシチェは長さ約500メートル，幅200-250メ

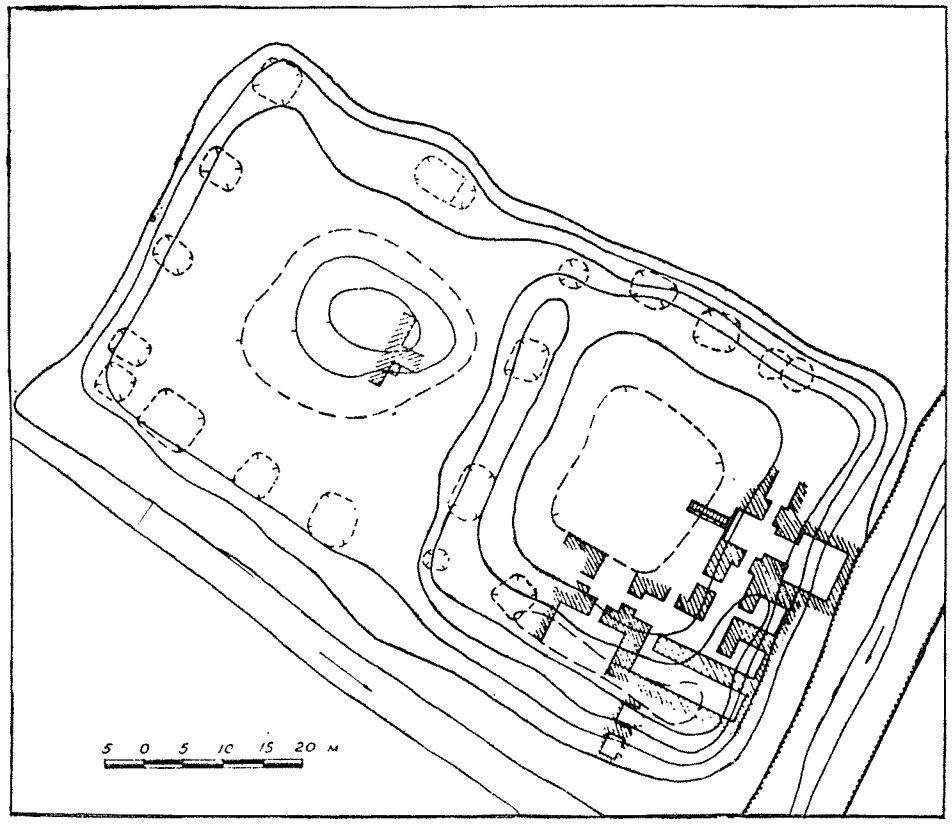


図2　アジナ・テペ平面図

ートルの大きなものである。試掘をおこなった結果，ウズベコン・テッパはクシャン時代から存在していたが，最も栄えたのは中世初期であった。ゼイマリはこのゴロディシチェを大唐西域記の忽露摩ではなかろうかと考えている。

ワフシュ川下流ではゼイマリが1957,59,60年におもに種々の遺跡の調査をおこない，とくに60年には古代および中世の灌漑運河の跡に注意が払われた。1961年には前年の調査のさい試掘がおこなわれたクルガン・テュベ東方12キロメートルのアジナ・テペ Аджина-Тепе の発掘がおこなわれた。このテペは試掘のさい7-8世紀のものとわかっていたが，発掘の結果仏寺であった（最近，新聞の外電によれば，ここで中央アジア最大の仏像が発見されたとのことである）。

ワフシュ川とピャンジ川の間の地がフッタルで，その首都フルブカの位置は不明であったが，クリャーブの西方に発見された。フルブカの発掘は1953年に始められ，1957年からグリャモワが発掘をつづけた。発掘されたのはその城塞の部分で，その時代は11-

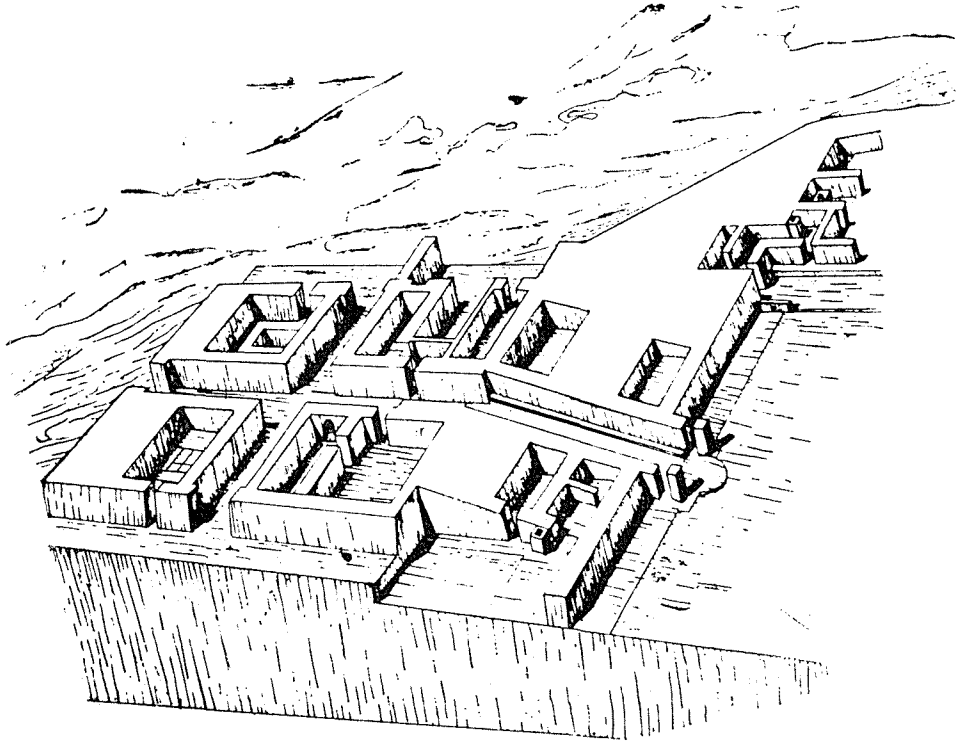


図3　フルブカ城塞復原図

12世紀と9-10世紀である。

1956年にパミールの発掘をおこなったベルンシュタムはその年の12月になくなり，リトヴィンスキイがそのあとをついで1958, 59, 60年に東パミールの遊牧民の墳墓を発掘した[28]。

ベルンシュタムは1946-56年に東パミールにおいて60以上の墳墓，その他の遺跡を発掘し，リトヴィンスキイは1958-59年に約200カ所を発掘した。ベルンシュタムは東パミールの編年を初期サカ（前7-6世紀），中期サカ（前5-4世紀），後期サカ（前3-2世紀）としている。後1世紀から2，3世紀になるとサカの遺跡は非常に少くなる。東パミールの遺物や遺跡はすべて，それらを残したものが遊牧民であることを疑いなく示している（東パミールには住居址は存在しない）。

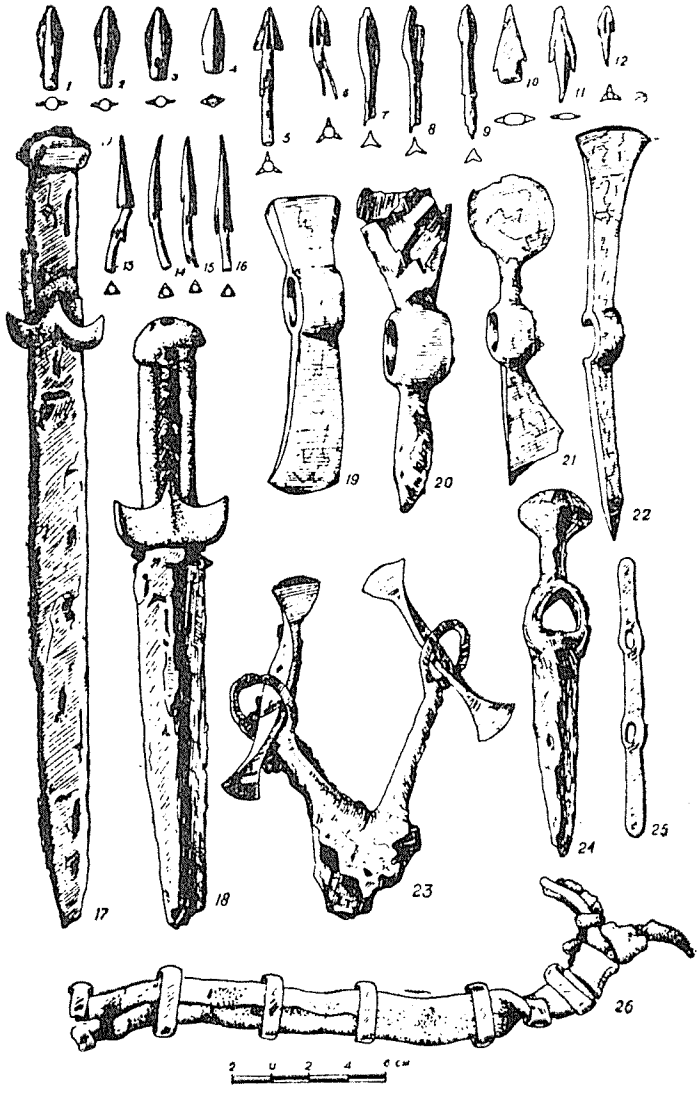


図4　東パミールの発掘物

この場合，東パミールの遊牧民はサカにほかならないが，パミールのサカは他の地域のサカとは異なっている（サカというのは集合的名称である）。キジル・ラバトの墳墓で発見された無文の土器は，その形態や技法がフェルガナやカイラク・クムのものに似ており，またジェルトゥイ・グンベズでは典型的なアンドロノヴォ的土器片が見られる。したがって，東パミールのサカの文化はフェルガナ=タシュケント地域と関係があった。また古典著作家が指摘しているように，サカの文化はスキタイのそれに非常に類似しており，近年の東パミールの発掘品は黒海沿岸のスキタイに似，とくに種々の器物にほどこされた<動物意匠>には類似点が多い。このように東パミールのサカの文化は，東ヨーロッパから中国北部までひろがるスキタイ的遊牧文化の一環をなしている。東パミールでサカの遺跡は南へはキジル・ラバトやジェルトゥイ・グンベズに達し，インドの方に出ているが，それより南についてはまだ調査されていないので明らかでない。しかし，インドの影響は東パミールの遺物に現われている。たとえば，他の地域に見られない蛙の形が出現している。また瑪瑙の首飾玉やヒマラヤ杉の器物があり，埋葬体の眼窩に貝殻が置かれている。これらは東パミールにおけるインドからの影響を物語るものである[29]。

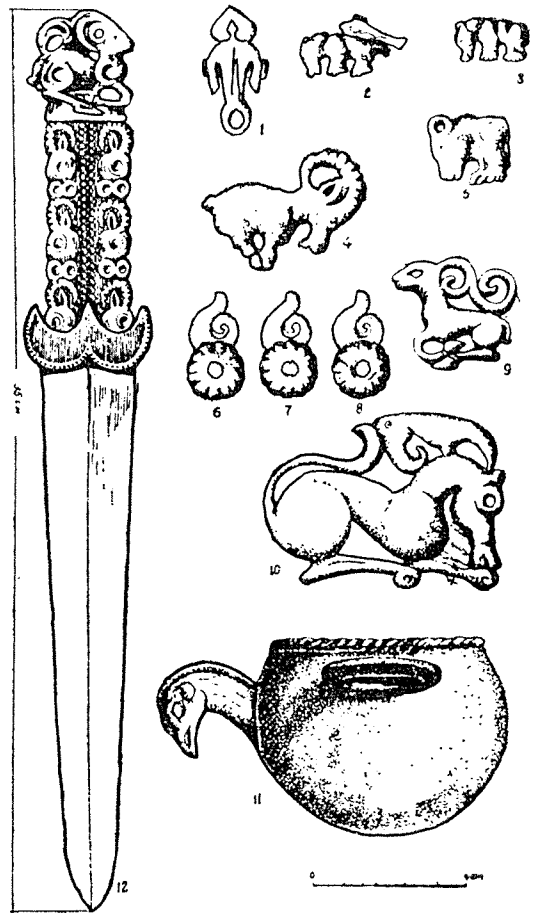


図5　東パミールの発掘物

ベルンシュタムは西パミールで多数の古代の城塞の跡を調査している（それらの幾つかは，かつて Stein も記している）。これらの城塞が南方を目ざす遊牧民にたいするものであったか，あるいはクシャン時代に中国の勢力に備えたものであるか，にわかに断

定はできないが，西パミールが戦略上の要地であったことや古代の交通路がこの地方を通過していたことは，これらの城塞の存在によっても明らかである[30]。

タジキスタンの考古学については，なお記すべきものが[31]多いが，ここではただタジク共和国科学アカデミア歴史研究所の最近の活動を中心として，タジキスタンにおける考古学的発掘のあらましを紹介して筆を擱く。

タジキスタンは古代のバクトリアの北部を占め，中央アジアにおける先進地域であるから，古代の遺物，遺跡が多数発見されるはずであるが，すでに述べたように，中央アジアにおける考古学的研究はようやく始まったばかりなので，今後に待つべきであろう。

（筆者は東海大学文学部教授）

註*

1) ムーグ山城については拙著『砂漠と草原の遺宝』（角川新書）pp. 145-148 を参照されたい。その文書について Согдиские документы с горы Муг（ムーグ山のソグド文書），I, II, 1962；III, 1963 があり，I はフレイマンのソグド文書について発表した論文を集めたもので，II はヴェ・ア・リフシッツ В. А. Лившиц による法律文書の転写，翻訳，注解，III はエム・エヌ・ボゴリュボワ М. Н. Боголюбова とオ・イ・スミルノフ О. И. Смирнов による経済文書の転写，翻訳，注解。また1963年にソグド文書の大型のコルプスが刊行された。

2) ヤクボフスキイは1953年になくなったので，エム・エム・ディヤコノフ М. М. Дьяконов がそのあとを継いだが，彼も翌54年になくなったので，ア・エム・ベレニツキイ А. М. Беленицкий が隊長になった。ヤクボフスキイについては『史学雑誌』第62編第11号の拙稿を参照。ディヤコノフのネクロロギーは『物質文化史研究所小報告』（КСИИМК と略す）55, 1954 に掲載されている。

3) タジク共和国科学アカデミアは1951年までソ連邦科学アカデミア・タジク支部であった。タジクの歴史研究所は考古学および古銭学，民族学，中世史，芸術史，ソヴェート社会史の5部から成り，考古学および古銭学部には26人の研究員がおり，研究所全体の人員は約120人である。

4) タジク調査隊の報告はソ連邦科学アカデミア考古学研究所の Материалы и исследования по археологии（ソ連邦考古学の資料と研究）（МИА と略す）のなかで刊行されている。その第1巻（1946-47年）は МИА, No. 15, 1950；第2巻（1948-50年）は同37, 1953；第3巻（1951-53年）は同 66, 1958；第4巻（1954-59年）は同 124, 1964 である。

5) Археологические работы в Таджикистане в 1956 году（Труды АН Таджикской ССР, т. XCI, Сталинабад, 1959）；1957年は т. CIII, 1959；58年は т. XXVII, 1961；59

---

* モスクワ発行の書籍は地名を省いた。

年は т. XXXI, 1961, Душанбе ; 60年は т. XXXIV, 1962 ; 61年は т. XLII, 1964. 筆者は残念ながらそれ以前のものも，以後のものも未見。

6) М, М, Дьяконов, Перспективы археологического изучения Таджикистана（エム・エム・ディヤコノフ，タジキスタンにおける考古学的研究の展望），Труды Таджикского филиала АН СССР, т. XXIX, 1951, стр. 19–35.

7) Б. Г. Гафуров, История таджикского народа в кратком изложении, изд. 1-е, 1949 ; изд. 2-е, испр. и доп., 1952 ; изд. 3-е, испр. и доп, 1955, 544 стр. с илл. 本書は1947年にタジク語で刊行され，のちにロシア語に訳された。

8) История таджикского народа, под ред. Б. Г. Гафурова и В. А. Литвинского（ガフロフ，リトヴィンスキイ編），тт. I– III, 1963–1965 гг. 本書は第2巻と第3巻がそれぞれ2分冊に分れている。

9) オクラドニコフはシベリアや中央アジアの旧石器時代の権威者。1965年に筆者がノヴォシビルスクのソ連邦科学アカデミア・シベリア支部の彼の研究所を訪れたとき，中央アジアやシベリアで集めた石器が無数のリンゴ箱にぎっしり詰っていたのには驚いた。タジキスタンの石器時代については МИА, No. 66, стр. 11–71 ; Каменный век Таджикистана. Итоги и проблемы, Материалы второго совещения археологов и этнографов Средней Азии（タジキスタンの石器時代，総括と問題。第2回中央アジア考古学者・民族学者大会資料），1959, стр. 158–184.

10) Итоги разведок памятников каменного века на Восточном Памире（東パミールにおける石器時代遺跡調査の成果），Материалы второго совещения археологов и этнографов Средней Азии, 1959, стр. 185–190.

11) ギッサル文化については註(9)所掲のオクラドニコフの二つの論文のなかで述べられている。

12) カイラク・クム文化については Б. А. Литвинский, А. П. Окладников, В. А. Ранов, Древность Кайрак-Кумов—Древнейщая история Сев. Таджикистана—（リトヴィンスキイ，オクラドニコフ，ラーノフ，カイラ・クムの大昔—北タジキスタン太古史—），Труды АН Тадж. ССР, т. 33, Душанбе, 1962 がある。

13) 西シベリアやカザフスタンの広い地域にひろまっていた青銅器文化で，その年代はシベリア考古学の専門家エス・ヴェ・キセリョフ С. В. Киселев の説によれば前1750–1200年である。牧主農耕の文化である。註(1)の拙著 pp. 36–44 を参照されたい。

14) アンドロノヴォ文化と大体同じころのホラズム地方の青銅器文化で，エス・ペ・トルストフ С. П. Толстов によって唱えられた。アンドロノヴォ文化にきわめてよく似ている。

15) おなじく前2000年紀のフェルガナにおける最初の原始農耕文化で，彩文土器をともなう。前掲拙著 pp. 34–36。

16) ガイドゥケヴィチは Работы Фархадской археологической экспедиции в Узбекистане в 1943-1944 гг. (1943-44年のウズベキスタンにおけるファルハド考古学調査の活動), КСИИМК, XIV, 1947, стр. 92-109. と題してベゴヴァト附近のシリンサイ墓地とムンチャク・テペのゴロディシチェの発掘について簡単に発表した。シリンサイ墓地は1-5世紀のもので，ムンチャク・テペの北郊にあった都市の墓地で，ムンチャク・テペでは4-5世紀の城塞が発掘され，9-12世紀にはその廃墟の上に住居がつくられていた。ムンチャク・テペはウスルーシャナの農業や商業の中心の一つであったが，モンゴル人に滅ぼされた（なお南タジキスタンにもムンチャク・テペというゴロディシチェがあるので混同しないこと)。

17) ピャンジケントの発掘報告は，さきにあげたタジク調査隊の報告書(МИА, 15, 37, 66, 124)の大部分を占めているほか，この遺跡にかんする著書，論文は非常に多いが，ここでは省略する。ピャンジケントについて前掲拙著 pp. 138-145 に簡単ではあるが述べてある。

18) А. Джалилов, Согд накануне арабского нашествия и борьба согдийцев против арабских забоевателей в первой половине VIII в. (ア・ジャリロフ，アラブ侵入前夜のソグドと8世紀前半におけるアラブ征服者にたいするソグド人の抵抗), Труды АН Тадж. ССР, т. XXX, 164 стр. はアラブ史料が用いられているのは言うまでもないが，ピャンジケント，その他の考古学的研究の成果が多く取入れられている。

19) Т. И. Зеймаль, Е. В. Зеймаль, Еще раз о месте находки Аму-Дарьинского клад, Известия АН Тадж. ССР（テ・イ・ゼイマリ，イェ・ヴェ・ゼイマリ，ふたたびアム・ダリア遺宝の発見地について，タジク共和国アカデミア報知), 1 (28), 1962, стр. 41-45 でゼイマリはディヤコノフのようにダルトン説を否定するには当らないとしているが，積極的な見解は述べず，南タジキスタンにおける考古学の発達によってこの遺宝の発見地が将来わかるかも知れないと期待している。前掲拙著 pp. 68-69 はだいたいディヤコノフの見解に従った。

20) МИА, 37, стр. 272-275. 前掲拙著 pp. 73-74.

21) МИА, 37, стр. 275-279; МИА, 66, стр. 290-310. 前掲拙著 pp. 74-77.

22) МИА, 15, стр. 154-178. 前掲拙著 pp. 77-79.

23) ベルンシュタムのセミレチェから天山，パミールに及ぶ広大な地域における研究の総括とも言えるのは Историко-археологические очерки Центрального Тянь-шаня и Памиро-Алая (中部天山およびパミール=アライの歴史考古学的概観), МИА, No. 26, 1952. である。

24) 本稿とは直接関係はないが，タジク共和国科学アカデミアからバルトリドの伝記が出版されたので挙げておく。Н. М. Акрамов, Выдающийся русский востоковед В. В. Бартольд (エヌ・エム・アクラモフ，傑出したロシアの東洋学者ヴェ・ヴェ・バルトリド), Душанбе, 1963, 110 стр. 本書はソ連邦科学アカデミアのアルヒーフ所蔵のバルトリドにがんする種々様々な文書を利用したもので，バルトリドの伝記として初めてのものではなかろうか。

25) Н. Н. Негматов, Историко-географический очерк Усрушаны с древнейших времен до X в. н. э., МИА, No. 37, стр. 231–252.

26) Он же, Усрушана в древности и раннем средневековье (Труды АН Тадж. ССР, т. LV, 1957), 157 стр. 本書は文献史料だけでなく，考古学の成果が大いに取入れられている。

27) これらの墓地で得た人骨についてテ・ペ・キヤトキナ Т. П. Кияткина が調査した。それによると当時南タジキスタンには種々様々な ethnic グループが居住し，いわゆる中央アジア河間地人種 раса среднеазиатского междуречья はまだ形成されなかった。またモンゴロイドの侵入は前1世紀にあとづけられるらしい(アルク・タウ墓地〔タジキスタン〕の頭蓋骨，人類学論集，III (Черепа из могильника Арук-Тау, Антропологический сборник, III, 1961, стр. 98–106))。なお，彼女はタジク共和国科学アカデミア歴史研究所における唯一人の人類学者で，この分野の研究はもっぱら彼女が担当している。

28) 1961年にア・デ・ババーエフ А. Д. Бабаев が東パミールを調査した。

29) Б. А. Литвинский, Археологические открытия на Восточном Памире и проблема связей между Средней Азией, Китаем и Индией в древности (ベ・ア・リトヴィンスキイ，東パミールにおける考古学的発見と中央アジア，中国，インド間の古代交通)。これは1960年の第25回東洋学者会議（モスクワ）における報告である。その後彼はタジキスタンとインドとの関係について更に詳細に論じている。Таджикистан и Индия, сб. Индия в Древности（タジキスタンとインド，論文集『古代印度』), 1964, стр. 143–165.

30) 最近この問題についてア・エヌ・ゼリンスキイ А. Н. Зелинский が書いている。Древние крепости на Памире, сб. Страны и народы Востока（パミールの古代城塞，論文集『東方の国々と民族』), 1964, стр. 99–119. なお彼はこの論文集でパミールの交通路についても論じている (стр. 120–141)。

31) たとえば，中央アジアにおける国家の発生の問題——バクトリアやホラズムはアケメネス王朝以前にすでに大きな政治的勢力であったとも考えられている——があり，考古学的史料にアヴェスタ，その他古典著作家の文献史料を援用する試みがなされているが，考古学的史料はまだ貧弱であり，文献史料はあまりに漠然としているので問題は殆んど解決されていない。この問題に触れたものは多数あるが，まず挙ぐべきはエム・エム・ディヤコノフ，Сложение классового общества в Северной Бактрии, Советская археология, XIX（北部バクトリアにおける階級社会の形成，ソヴェート考古学，第19), 1954, стр. 121–140. なお，ヴェ・エム・マッソン В. М. Массон やユ・ア・ザドネプロフスキイ Ю. А. Заднепровский もそれぞれマルギアナ (МИА, No. 73) やフェルガナ (МИА, No. 118) の原始農耕文化を研究した著書のなかで，この問題に一章をあてている。